

大学生からみた無気力にみえる 大学生の行動特性の把握

長内 優樹*

Behavioral Characteristics of University Students Who Appear Lethargic to Other University Students

Yuki OSANAI*

The objective of the present study was to elucidate the behavioral characteristics of university students who appear lethargic to other university students. A survey was first conducted on university students, and the behavioral characteristics assessed as lethargic were collected by restricting the raters and ratees to university students ($n=100$, 197 items). Next, the items obtained in the survey were classified by graduate students ($n=4$) based on the lethargic behavior list created with university students as the raters in a previous study. The results showed that the behaviors of "appearing to lack a sense of purpose", "often saying 'It's too much trouble'", and "often saying 'I'm feeling sluggish'" were characteristic signs of lethargy from the perspective of university students.

key words: lethargy, behavioral characteristics, university students, open-ended questions.

問 題

無気力に関する心理学的な研究のうちスチューデント・アパシー (Walters, 1961) を背景にもつ研究は日本において独自の発展を遂げ、そのうち実証的な研究は主に大学生を対象におこなわれてきた。その研究の多くに共通する最終的な目的は、無気力を呈する個人に対する教育的・臨床的対処法を明らかにすることであると考えられるが、研究者間で無気力であると判断される行動に一貫性がみられないことが指摘されている (下坂, 2001)。こうした問題は、おのおのの教員・研究者の立場から学生に期待する行動があり、それが学生の無気力的な行動を判断する際に影響してしまうためであると考えられる。教員・研究者の立場から無気力的であると判断される行動も大学生の適応上の問題となることは事実であるが、大学生自身にとって無気力的である行動を見過ごす恐れがある。そのため、長内・今野 (2013) では立場の違いによる期待の影響を考慮し大学生自身からみて無気力であると評定される大学生

の行動特性の把握を試み、「回避的」因子と「不平不満」因子からなる計 11 項目の行動特性を把握した。しかし、長内・今野 (2013) は、予備調査および本調査ともに教示文において評定者-被評定者の属性が明確でなく、項目の妥当性に課題が残されている。

目 的

評定者-被評定者の立場を大学生に限定した上で無気力的であると評定される行動特性を収集し、長内・今野 (2013) で得られた行動特性と比較し、大学生からみて無気力にみえる大学生の行動特性を明らかにすることを目的とする。

方 法

項目の収集 大学生からみて無気力にみえる大学生の行動を表す項目を以下の方法で収集した。

調査参加者 関東圏内の私立大学の大学生 117 名 (男性 44 名・女性 73 名: 1 年生 88 名, 2 年生 28 名, 3 年生 1 名)。

調査時期 2013 年 5 月。

調査方法 複数の自己記入形式の尺度から構成した調査票を用いた調査を心理学関連の講義時間内に集合形式で実施した。回答は任意、謝礼は呈示していない。本研究で分析対象としたのは、上記調査票内で「大学生であるあなたの知っている“無気力な大学生”、“やる気のない大学生”はどのような特徴を持っていますか。以下に思いっただけ自由にお答えください。」という教示文によって得た自由記述回答である。

項目の整理 回収した調査票のうち自由記述の回答欄に対して未回答であった 17 名を除外し、100 名 (男性 40 名・女性 60 名) の回答を分析対象とした。調査協力者の回答のうち複数の行動に言及してある回答については、一つの回答が単一の行動を示す独立した項目となるように分類を行った。その結果、197 の項目に分類された (項目の例を Table 1 に示す)。

先行研究との比較 上記の 197 の項目と長内・今野 (2013) によって示された行動特性の一致率を検討するために以下の方法を用いた。

調査参加者 関東圏内の私立大学の大学院生 4 名 (男性 4 名: 修士課程 2 年生 4 名)。いずれも臨床心理学を専攻。

調査時期 2013 年 9 月。

調査方法 先行研究 (長内・今野, 2013) による大学生からみた無気力にみえる行動特性 11 項目にアルファベットで番号をふったラベルを横軸、予備調査で収集した項目を縦軸に列挙した (計 197 項目) 調査用紙を作成し、個別回答方式で「以下のそれぞれの項目について内容的に同じと判断できるものが A~K の選択肢にあれば○をなれば選択肢 L に○をつけてお答え下さい」という教示のもと回答を求めた (選択肢 L は「L. どれにもあてはまらない」)。

結 果

4 人の大学院生それぞれが自由記述回答 197 項目を、長内・今野 (2013) において示された行動特性 11 項目と比較し同義と判断した項目を集計した (Table 2)。197 項目×4

* 法政大学現代福祉学部

Faculty of Social Policy & Administration, Hosei University,
4342 Aihara-machi, Machida, Tokyo 194-0298, Japan
現所属: 吉備国際大学大学院心理学研究科
Graduate School of Psychology, Kibi International University,
8 Igamachi, Takahashi, Okayama 716-0018, Japan

Table 1 大学生からみた無気力にみえる大学生の特徴についての自由記述回答の例

だらだらしている／目標のない／授業に出て寝ている／言われたことしかやっていない／他力本願／口先だけ／勉強ができるだけのパカ／どりあえず群れにいる／意志がない／目標がない人／根拠のない自信、過信がある／決めかねている目的、目標がある／自分はどうしたいかという考えをまどめられずにいる／自分のしたい事ではないと思っている／学校に夢中になれるものがない／授業が終わったらさっさと帰る／授業中に本格的に寝る態勢になっている人／授業に遅刻する回数が多い人／身支度を整えていないこと／授業にでない／夜勤をしている

注) 原文ママ

Table 2 先行研究を基準とした自由記述回答の分類

長内・今野 (2013) による項目	項目数	評定一致率が 100% であった項目
第 1 因子 回避的		
人と交流をもとめない	30	
目がうつろ	19	
家にもろがち	18	
ため息が多い	26	
目的意識が感じられない	140	目標がない／目的意識がない
第 2 因子 不平不満		
「なんでもいい、どうでもいい」という発言が多い	41	
「面倒くさい」という発言が多い	95	面倒くさいが口癖／「めんどくさい」っていう
「だるい」という発言が多い	98	
自主的に行動できない	54	受動的
ぼーっとしていることが多い	26	授業に出てもボーッとしている
とるべき行動を認識しつつも、行動に移していないようにみえる	53	口先だけ／「単位ほしい」というわりに努力しない
どれにもあてはまらない	187	遊ぶことの心地よさを知っている／忙しくないこと／授業に出てる
合計	787	

名であるので合計項目数は 788 項目となるが、回答漏れが 1 項目あったため合計の項目数は 787 であった。もっとも多く分類されたのは、「どれにもあてはまらない」であり、続いて「目的意識が感じられない」、「面倒くさい」という発言が多い、「だるい」という発言が多い、の順で項目数が多かった。

続いて、大学院生 4 名による評定の一致率が 100% の項目は 11 項目みられた。長内・今野 (2013) の第 1 因子「回避的」を構成する項目では「目標意識が感じられない」に対して「目標意識がない」という項目が 100% の一致率で分類されていた。また、第 2 因子の「不平不満」を構成する項目では「めんどくさい」という発言が多いに対して「面倒くさいが口癖」、「めんどくさい」っていう」という 2 項目、「自主的に行動できない」に対して、「受動的」、「ぼーっとしていることが多い」に対して「授業に出てもボーッとしている」、「とるべき行動を認識しつつも、行動に移していないようにみえる」に対して「口先だけ」、「単位ほしい」というわりに努力しない」が 100% の一致

率で分類されていた (計 8 項目)。また、「どれにもあてはまらない」には計 3 項目が分類されていた。

考 察

本研究で収集した項目は長内・今野 (2013) の「目的意識が感じられない」、「面倒くさい」という発言が多い、「だるい」という発言が多い」に比較的多く分類された。このことから、これらの項目は大学生からみて無気力にみえる大学生の行動特性として捉えることができると考えられる。しかし、この結果は長内・今野 (2013) を基準とした分類であるので評定者 - 被評定者を大学生に限定しても、またはしなくても、共通して無気力的であると判断される特性であることに留意しなければならない。

また、分類結果をみるといずれにもあてはまらないと判断される項目が多いこと、評定一致率が 100% である項目が 8 つしかないことから、長内・今野 (2013) の 11 項目は評定者 - 被評定者を大学生に限定した無気力の行動特性を表す項目としては妥当性が十分でないこと可能性が示唆された。しかし、こうした結果は無気力的と判断される行動は評定者 - 被評定者の立場に影響されることを如実に示しているといえ、長内・今野 (2013) が指摘した「評定者と被評定者の関係性に依存した無気力像と両者の関係性に依存しない一般的な無気力像の存在」を部分的に支持する結果であるといえる。なお、Table 2 の「どれにもあてはまらない」における「授業に出てる」は、無気力な学生の特徴として回答されたものではあるがその解釈が本研究で得られた情報からだけでは不可能であった。

今後の課題として第一に自由記述 197 項目を本研究のような特定の基準に準拠せずにその内容的な類似性から分類し、大学生からみて無気力にみえる大学生の行動特性を整理すること、第二にそれらと教育的・臨床的対処を必要とする無気力状態の関連を探ることが求められる。

引用文献

- 長内優樹・今野 順 2013 大学生からみた無気力にみえる他者の行動特性の把握 応用心理学研究, 39(2), 152-153.
- 下坂 剛 2001 青年期の各学校段階における無気力感の検討 教育心理学研究, 49, 305-313.
- Walters, P. A. Jr. 1961 Student Apathy. In Blaine, G. B. Jr. & McArthur, C. C. (eds.), *Emotional Problems of the Student*. East Norwalk, CT: Appleton-Century-Crofts, pp. 153-171.

(受稿: 2013.12.10; 受理: 2014.8.4)